

英語学習者が直面する「壁」

「英語学習はまず基礎固めが重要だ」—私は大学では英語を専攻し、予備校で受験生に英語を教えるようになって四半世紀になりますが、私自身のみならず、同僚や同業者などと話す機会があっても、この意見に反対する人はいません。

ところが、私自身が授業で学習法について話をしたり、学習相談に来る受験生に上記アドバイスをしたりすると、とたんに嫌な顔をされます。「難関大学を目指すのに基礎なんて勉強する必要はないじゃないですか」と言われたこともあります。なぜ教える側と教わる側にこんなにも温度差があるのでしょうか？

ひとつには、「基礎」という言葉に問題があるのではないかと思います。私自身これまで何万という受験生と接してきましたが、どうも「基礎＝簡単なこと」と勘違いをしている学習者がかなり多いようです。私が言うところの「基礎」はこの「礎」、つまり「土台」にあたるものです。土台のない建物は崩れてしまいます。基礎を固めずに難しいことをするというのは、自動車の運転免許を持たない人がいきなり高速道路で車を運転するようなものです（事故になりますよね）。車の運転であれば、まずは教習所に行ってあれこれルールや技術を学びます。でも学んだ瞬間に高速道路に行けば確実に事故を起こします。免許取得までに何度もルールや技術を反復練習して「無意識の状態でも瞬時にあれこれ判断できる」という状態まで鍛え上げるからこそ、快適な運転ができるようになるわけです。英語も同じだと思いませんか？ 難しいものに立ち向かうためには、そういう土台を固め、無意識の状態でもルールを使いこなせるようにすることが重要です。それが難しい英語の文章を読んだり、英語を書いたり聴いたりすることなどに立ち向かうための第一歩なのです。

そういったことを説明すると納得してもらえることが多いのですが、いざ、「じゃあ基礎固めをしましょう」と言うところまで「でも……」と躊躇をする学習者がものすごく多いのです。なぜでしょうか？ もちろん人それぞれに理由があるのですが、どうもいろいろな受験生の話を聞いていると、「基礎を勉強していると、『簡単なことをやっている』と周りから馬鹿にされるんじゃないか？」という声がよく聞かれます。そもそも「基礎＝簡単」なことではないですし、別に周りにどう思われようが関係ありません。むしろ基礎をおろそかにして足元をすくわれる方がよっぽど恥ずかしいと思うのですが、基本的な文法事項を勉強せず、簡単な単語は辞書で調べもせずに、ひたすら難しい単語ばかり覚えようとして、結局英語がまったく理解できていない人がたくさんいるように見受けられます。勘違いしないでいただきたいのは、私は「難しいことを勉強するな」と言っているのではないのです。勉強したっていいんです。ただ、基礎を固めることもせずに難しいことだけ勉強しても意味がない、と言いたいのです。

英語学習に何が必要か

読解、作文、リスニング、スピーキングや語彙など、英語のさまざまな学習項目の土台にあるのは「英文法」の知識です。書店で「英文法」というタイトルの付いている参考書類を手にとってもらうと、どれも何百ページにもおよび、その知識量は膨大です。英語ができるようになるためには、その膨大な知識を覚えるだけでは不十分です。前述の運転免許のたとえ話で話したように、「英語に触れた瞬間に無意識にどの文法知識を使うのか」ということが判断できる状態まで仕上げられると、一気に英語力がアップするはずですが。

私自身、高校生のときに部活動に没頭するあまり、学校の勉強をほとんどしていませんでした（高校の授業自体も、英語は教師が生徒を指名して和訳を読み上げさせるだけでした。文法は「グラマー」というタイトルの授業があったのですが、実質は英作文で、和文を指名した生徒に黒板に書かせて教師が○か×をつける、というだけで、英文法そのものや英語の読み方を習うことはありませんでした）。それなのに、教科書に掲載されている英文を見て単語がわからないので、自分が知らない難しい単語だけ覚えれば英語が読めるようになって決めつけて、当時書店で平積みされていたある単語集を購入して、試行錯誤しながら、掲載されている単語をすべて「暗記」しました（カギカッコをつけたのは、当時覚えたつもりになっていましたが、根本的な意味では理解していなかったからです）。ところが、いくら単語の意味を覚えても、英語の文章に書いてあることはさっぱり理解できませんでした。そんな感じだったので、どこの大学にも合格できずに浪人をしたのですが、初めて「英文法」の勉強をはじめた瞬間に、それまで意味不明だった英単語の意味が紐解けて、英語の文章が理解できるようになり、成績も飛躍的に伸びたのです。そして、試験で辞書や参考書が使えなくても無意識に知識が出せるようにトレーニングをした結果、高校生のときとは段違いの英語力が短期間で身についたのではないかと考えています。

英文法の展望台とは

英文法の知識は膨大なので、まず学習する際に知識がごちゃごちゃになってしまって、何を勉強しているのかわからなくなります。またその知識をアウトプットして使う際にどの知識を使ったらいいのかわからなくなってしまいます。だから英文法の学習は難しく感じるのではないかと思います。

ですから、基礎を固めることで、その膨大な知識をわかりやすく整理することが、インプットもアウトプットも楽にする近道なのです。ところが、前述の通り、「基礎」という言葉が「簡単なことをやっている」という誤解を招くことは否めないと思います。そこで、今回、視点を変えてみることにしました。本書の「英文法の展望台」が表すよう

に、「基礎」というのは、「展望台に上って景色を眺める」ことだと意識してみたらいかがでしょうか？ 展望台から全体像を眺めれば、「どの知識がどこで使われているのか」ということが一目瞭然ですから、インプットがしやすくなるだけではなく、アウトプットもしやすくなります。

そもそも学習にプライドもへったくれもなく、みなさんは他人のためではなくご自身のために勉強しているのですから、他人からどう思われようと気にせず勉強をすればよいと思います。「基礎をやっていると馬鹿にされるんじゃないか」と思っている人も、「自分は展望台に上っているんだ」と考えれば、むしろ優越感にひたれるのではないのでしょうか？

こんな方に読んでいただきたい

本書はそういう意味で、レベルを問わずさまざまな方に読んでいただきたいのです。例えば学校英語でつまづいている高校生や、英語の勉強をやり直したい社会人の方、英語の成績が伸び悩んでいる大学受験生や、単語とかの勉強を頑張っているけどなかなか英字新聞や洋書がスラスラ読めない方、さらには英語を教える立場にある方など、さまざまな方にとって役に立つ内容になるのではないかと思います。

本書の特徴

難しいことを難しく説明することは、書く側にとってはある意味、簡単です。ですが、それでは読むのも覚えるのも大変ですし、アウトプットもしにくくなってしまいます。むしろ本書では、どんなに難しいことも、単純な「型」に当てはめることで、知識の整理の単純化を図っています。単純化しておけば、覚えるのも楽なだけでなく、アウトプットする際の負担もかなり減ると思います。そして、ただ一方的に知識を提示するのではなく、その知識事項を読者のみなさんが使いこなせるように、「実際に手を動かしてトレーニングする」という要素をふんだんに盛り込みました。これにより、「無意識の状態ですら瞬時に英文を判断できる」状態に近づけると思います。

世の中には「英文法」という名の付いた本は山ほどあります。中には読者にとってわかりやすく説明するために、文法用語を使わずに説明したり、イラストだけで説明したり、筆者が考えた独自の文法用語で説明したりといった本もあります。それらを批判するつもりはありませんが、私は本書であえて文法用語を積極的に使うことにしました。その理由を説明しておきます。

みなさんの英語学習は、この本を読んでおしまいではありません。この本を読み終わった後に、さらに読んだり書いたりしながら英語力を高めていくことになるのだと思います。その際にわからない知識事項などがあったらどうしますか？ 単語であれば辞書を引けばよいわけですが、単語の使い方がわからない場合や、よくわからない文法事

項が出てきた場合には、文法書の目次や索引を使ってその知識事項を調べ、確認するという作業がどうしても必要になってきます。その際に文法用語を知らないとか、その本でしか通用しない独自の文法用語で覚えていると、そういう派生的な学習ができなくなってしまうのではないかと思います。そこで、本書では一般的な文法用語を提示した上で、どういうレベルの人が読んでもわかるように、「わかりやすい説明」をするよう心がけています。

本書はそういう意味で英文法の「全体像」をつかむことが目的ですので、「仮定法」や「比較」など、応用的なことは扱わず（ただしそれらが全体像のどこで使われるのかについては示しています。それらの文法項目についてはまたどこか機会をあらためて説明できればと思います）、全体像を使い、大きな枠組みでどうやって使いこなせるようになるのか、ということに焦点を当てています。

本書がみなさんの英文法理解の一助となり、また今後みなさんが英語の学習を続けていくにあたり、どこかで道に迷ってしまったとき、またこの展望台に戻ってきて、今自分がどこで迷っているのかを確認するための指標になればいいなと思いながら執筆しました。本書がみなさんの道を照らすような存在になれば幸いです。

著者

目次

はじめに一本書が目指すもの	1
本書の使い方	10
英文の「全体像」	12

第1部 カタマリを理解する

1 意味のカタマリ	18
1 句	18
1 to + V原形 (不定詞)	19
2 Ving	20
3 Vp.p.	22
4 前置詞句	22
演習 1-1-1 意味のカタマリ：句	24
2 節	26
1 従属節	26
2 等位接続詞	32
演習 1-1-2 意味のカタマリ：節	36
2 名詞のカタチ	38
1 限定詞	38
2 前置修飾の形容詞	39
3 名詞	39
4 後置修飾の形容詞 (句・節)	39
1 語	39
2 句	40
3 節	41
演習 1-2 名詞のカタチ	43
3 修飾	45
1 形容詞	45
2 副詞	45

3	前置詞句	46
4	付加部	47
	演習 1-3 修飾	49

第2部 全体像の要素を見分ける

1	文頭のパターン	52
1	文頭の副詞	52
	1 「語」としての副詞	52
	2 副詞句	54
	3 副詞節	56
	4 「文頭の副詞」という考え方の応用	57
	演習 2-1-1 文頭の副詞	59
2	主語	61
	1 主語になる名詞句	61
	2 主語になる名詞節	62
	3 仮主語（形式主語）	63
	4 文頭のパターン—文頭の副詞と主語の見分け方	65
	演習 2-1-2 主語	68
2	動詞とその周辺	70
1	動詞のカタチ（+助動詞）	70
	1 動詞の種類	70
	2 助動詞	72
	3 述語動詞の位置に現れる副詞	77
	演習 2-2-1 動詞のカタチ（+助動詞）	79
2	動詞の時制	81
	1 基本時制と進行形	81
	2 完了形	85
	3 未来を表す表現	91
	演習 2-2-2 動詞の時制	95

3	動詞の文型	97
	1 「基本5文型」という考え方について	97
	2 「基本5文型」の概要	98
	演習 2-2-3 動詞の文型	104
3	補部—より正確な理解へ	106
1	第1文型+α	106
	1 第1文型のいろいろなパターン	107
	2 S + V + A	107
	3 中間動詞	111
	4 There構文	112
	演習 2-3-1 第1文型+α	119
2	第2文型+α	121
	1 擬似補語 [準補語]	121
	2 SVCA	122
	3 It is C + that .../wh- ...	128
	4 tough構文	131
	演習 2-3-2 第2文型+α	135
3	第3文型+α	137
	1 SV + O (=名詞句)	137
	2 SV + O (=名詞節)	141
	3 SVO + 付加部	147
	演習 2-3-3 第3文型+α	149
4	第4文型+α	151
	1 与格交替	151
	2 SVO ₁ O ₂ で [O ₂ =節] の場合	158
	演習 2-3-4 第4文型+α	162
5	第5文型+α	164
	1 SVOC : O = Cになるパターン	164
	2 SVOC : C = 不定詞になるパターン	168
	3 SVOC : C = 分詞になるパターン	173

演習2-3-5 第5文型+α	178
4 文末の副詞	180
1 副詞的目的格	180
1 動詞を修飾	180
2 形容詞・副詞を修飾	181
2 分詞構文	182
3 副詞節	183
演習2-4 文末の副詞	185

第3部 さまざまな文のパターンに対応する

1 文の種類	188
1 さまざまな疑問文	188
2 命令文・感嘆文	191
3 間接疑問文	192
演習3-1 文の種類	196
2 態（能動態・受動態）	198
1 受動態の作り方と意味	198
2 受動態にできる動詞	200
1 第3文型と受動態	201
2 第4文型と受動態	202
3 第5文型と受動態	203
3 その他、自動詞や熟語に関する受動態	204
演習3-2 態（能動態・受動態）	208
3 例外（倒置など）	210
1 疑問文の語順になる「倒置」	210
1 文頭に否定を表す副詞の強調	210
2 so/such ~ that ... の強調	213


2	文要素の「倒置」	214
3	強調構文 [分裂文]	218
4	省略	223
	1 動詞句省略	223
	2 名詞句省略	225
	3 空所化.....	225
	演習 3-3 例外 (倒置など)	227
	総合演習	229
	今後の展望—あとがきに代えて	237
	索引	239
	主要参考文献	242

1. 「全体像」からはじめて、前から順番に

本書は英文法を体系的に学習できるように構成していますので、前から順番に読むことをお勧めします。もちろん、ある特定の文法事項を、目次や巻末の索引などを利用してながら部分的に読みたいという方もいらっしゃると思いますが、その場合も、冒頭の「英文の『全体像』」を必ず読んでください。また、学習が進んでいて「今自分がどこにいるのかわからなくなってしまった」などという場合も、常にこの「英文の『全体像』」の部分に戻るようになしてください。この部分と全体との関係を意識しながら読むことで、英文法の知識が体系的に頭に入るとなると思います。

2. 「全体像」を書き込んでみよう

項目は、例文と解説から成り立っていますが、例文の解説をする際に、「英文の『全体像』」で提示した以下の図を提示しています。

	① 副詞	② 主語	③ 述語動詞	④ 補部	⑤ 副詞
					

この図に例文の英語を分解して記入した上で、その後の解説を読むようにしてください。ただしスペースの関係で、すべて上記の大きさになっています。書き込むのに狭いと思われる場合、別途ノートを作成したり、あるいは例文に上記の図の番号を振ったりするなど、ご自身がやりやすい方法で対処してください。また、ウェブサイト上で、大きめの「全体像」の図のフォーマットを提供していますので、そちらを利用していただくこともできます。

3. 音声も活用してみよう

それぞれの例文には音声データが用意されています。解説を読み込んだら、音源を活用しながら例文そのものを暗唱していきましょう。音源を活用することでリスニングの力が高まるだけでなく、例文を暗唱して音源に合わせて発音する練習などをすれば、スピーキングの力を高めるのにも役立つはずです。

4. 「演習」で確認しよう

各項目に「演習」が付いています。基本的には各項目で学んだことを確認するための和訳問題、語順を確認するための整序英作文、そして「3」の過程で英文を暗唱できたかどうかを確認する英作文問題です。直後に解答解説があります（英作文は暗唱できたかどうかを確認するものですから、解答の提示のみをしています。間違えたものは本文に戻って確認し、正確に暗唱し直しましょう）。

5. 「総合演習」で実際の英文に挑戦

巻末に「総合演習」として、実際の英語の文章を読む練習を掲載しています。本書をひとつお読み終えたら、ぜひ挑戦してみてください。

6. 索引を使って復習しよう

巻末に索引を掲載しています。本書を読み終えても、あれこれ忘れてしまったりすることもあるかと思います。そのような際にこの索引からもう一度該当する部分を調べて読み直したり、それでもわからなくなったら冒頭の「英文の『全体像』」のところを参照したりする、ということを繰り返しましょう。

凡例

本書の解説で使用されている記号類は以下の意味で使用しています。

- [] : 節
- () : 句
- < > : 副詞と前置詞句
- ～ : 語 (句) の略
- … : S + V の略
- * : 非文 (文法的に誤った文)

音声データなど

本書の音声データ、および「全体像」書き込みシートのデータは、下記のウェブサイトからご利用いただけます。



https://www.9640.jp/books_976

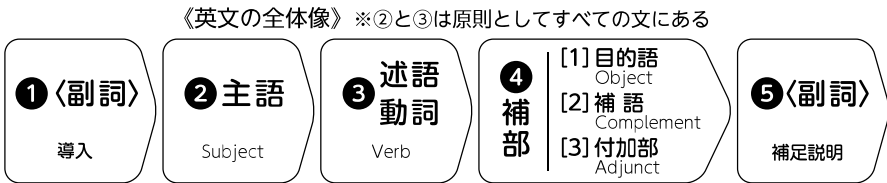
※図書館の館内または館外貸し出しなどで、本書を一時的に利用する方もお使いいただけます。

※「総合演習」の文章の音声は、権利の都合上、掲載しておりません。

英語の文は、単語を「左→右」へと並べていくわけですが、どういう順序で並ぶのかということはある程度決まっています。その「語順」が英文の意味と密接に結びついているのです。そして英語の単語や文法事項はこの語順のどこでどのように働くのかが決まっています。まずこの語順の「全体像」をしっかりと押さえて、さまざまな知識事項がこの全体像の中でどう働くのかを覚えていくと、この全体像が「知識の整理棚」のような働きをして、知識のインプット・アウトプットが格段に楽になると思います。

この全体像は、下のように大きく5つに分けられます。①～⑤に入る品詞はある程度決まっていますが、必ずしもその品詞がくるとは限りません。むしろ、①～⑤はそれぞれ意味役割を持った「位置」だということを意識しましょう。

5つの位置



詳細は各章で扱いますが、ここでは①～⑤のそれぞれの役割について大まかに説明します。以下の文を例に、それぞれの役割を見ていきましょう。

Luckily, I found the book at the bookstore yesterday.

①文頭の副詞

文頭に副詞がくることがあり、「これからこういう話をしますよ」という話の導入のような内容になります。ですから、すでに文脈上出てきた内容（これを「旧情報」と呼びます）などが現れることが多いです。詳しくは「文頭の副詞」(p. 52)の章で扱いますが、副詞ではないものもここに現れることがあります。この場合は副詞という品詞にこだわるよりも、「文の導入をする位置」であるということを意識しましょう。

▶ 例文では Luckily 「幸運にも」が文頭の副詞です。「この文が幸運な出来事について述べているのですよ」という導入をしています。

②主語

主語のことを英語では Subject というので頭文字をとって S と表記します。その文の「主題」となる部分で、日本語の「～は、～が」に相当します。主語になるのは原則として文頭の名詞 (p. 61 「主語」参照) ですが、ここも「主題」という役割を満たすために名詞以外の要素がくることがあります (p. 114, 214)。

1 意味のカタマリ

〈全体像におけるこの項目の「位置」〉



「英文の『全体像』」で示したことは、原則としてほぼすべての英文に当てはまります。ところが、「では今から洋書を読んでみましょう！」となると、この全体像にうまく当てはめられず行き詰まってしまう。それはなぜでしょうか？

例えば、I like coffee.のような簡単な文であれば、全体像の①～⑤のどこかに1語ずつが当てはまる (②I ③like ④coffee) わけですが、英文のレベルが上がると、複数の語が全体で1つの「意味のカタマリ」となって①～⑤の中で働くので、それを見抜けないと英文の意味がとれなくなってしまうわけです。語彙力をつけてもなかなか思うように英文が読めない原因がまさにこのことなのです。

逆に言えば、語彙力をつけることも必要ではありますが、この「意味のカタマリ」をしっかりとらえることができれば、一気に難しい英文をさばけるようになるはず。意味のカタマリには「句」と「節」があります。それぞれ詳しく見ていくことにしましょう。

1 句

TR01

「句」というのは、簡単にまとめると「〈主語+動詞〉という文を含まない2語以上からなる意味のカタマリ」のことです。例えば、an interesting book「興味深い本」は、全体で名詞のカタマリですがこの中に〈主語+動詞〉という文は含まないので「名詞句」と言います。また、後で詳しく見ていきますが、この他に「形容詞句」や「副詞句」があります。

ただ、本書では、複雑な英文法の知識を英文の全体像の中ですっきりと整理するという観点から、代表的な句を導くものとして、以下の形でまとめておきたいと思います。

	to + V原形	Ving	Vp.p.*	前置詞句
名詞句	○	○	×	×
形容詞句	○	○	○	○
副詞句	○	○	○	○


*Vp.p.のp.p.はpast participle「過去分詞」の頭文字を取ったものです。本書ではVp.p.という略語で表すことにします。

本書では、句のうち「準動詞」(to + V原形/Ving/Vp.p.)が導く句は、() にくって、1つのカタマリとして扱うことにします(「前置詞+名詞」および「副詞」についてはく) にくることにしますが、詳しくはp. 45「修飾」参照)。世間では品詞別にカッコの種類を区別することが好まれているようですが、それをすると、品詞にこだわりすぎて読解の妨げにもなってしまいます。最終的にはカッコをつけずに読んだり話したりするようになるわけですから、本書ではひとまずカッコで示し、みなさんが慣れてきたらカッコでくくる代わりに意味の切れ目をスラッシュ (/) などで区切り、さらにそれにも慣れてたら何も記入をしない、というように簡略化をしていくとよいのではないかと思います。

詳しくは他の章で扱いますが、簡単にそれぞれの働きを例文で確認しましょう。まだ扱っていない知識事項もありますが、まずはわかる範囲でかまいませんから、それぞれの例文を自分なりに「全体像」に当てはめた上で直後の解説をお読みください。

1 to + V原形 (不定詞)

To learn a new language requires patience and dedication.

	① 文頭の副詞	② 主語	③ 述語動詞	④ 補部	⑤ 文末の副詞

▶ To learn a new language 「新しい言語を学ぶ」という部分がrequiresに対する主語になる名詞句になっています。これを「不定詞の名詞用法」と言って、「[Vすること]と訳します。

①	②	③	④	⑤
	(To learn a new language)	requires	patience and dedication	

【訳例】 新しい言語を学ぶには忍耐と献身が必要だ。

I am looking for a book to read on the beach.

	① 文頭の副詞	② 主語	③ 述語動詞	④ 補部	⑤ 文末の副詞

▶ to read on the beach 「ビーチで読む」が直前のa bookを修飾する形容詞句になっています。これを「不定詞の形容詞用法」と言って「[Vするための]と訳します。ちなみ

1 文頭のパターン

〈全体像におけるこの項目の「位置」〉



1 文頭の副詞

TR09

「英文の全体像」の①の位置にくる「副詞」は、「これからこういう話をしますよ」という導入部分になります。ここには、前の文とのつなぎ言葉や、前の文の内容を受けた「旧情報」（すでに前の文までに述べられた内容や、常識的に読者も知っていると思われる内容）などがきます。

具体的に、語・句・節として現れる例を以下で見えていきましょう（②の位置以降の部分はまだ本書で扱っていない文法事項が含まれている可能性があります、まずは文頭のパターンを理解することを目標に例文と説明を読み込んでください）。

1 「語」としての副詞

文の導入やつなぎ言葉としての副詞

Last night, I watched a movie with my friends at home.



▶ last night が、この文で述べられている背景として昨夜の出来事であるということを示す、導入の副詞の働きをしています。ちなみにnightは「夜」という意味の名詞ですが、this, that, next, last, each, everyがこのような時を表す名詞に付くと、全体で副詞の働きをするので、前置詞などは不要です（これを「副詞的目的格」と言います）。



[訳例] 昨晚は、友達と家で映画を見た。

文修飾の副詞

Clearly, the new software is more efficient than the old one.

① 副詞	② 主語	③ 述語動詞	④ 補部	⑤ 副詞

▶ clearly 「明らかに」が「新しいソフトウェアのほうが古いものより効率的だ」という文全体を修飾する副詞です。It is clear that the new software is more efficient than the old one.と意味的に対応します。文修飾の副詞のすべてではありませんが、一部の〈形容詞 + ly〉という形をした副詞（probably, possibly, regrettably, fortunately, clearlyなど）は、〈It is 形容詞（probable, possible, regrettable, fortunate, clear）that ...〉で置き換えることができます。逆に、It is clear that ...という形を見たら、頭の中でClearlyという文頭の副詞に置き換えて読むようにすると、構造をとらえるのが楽になるかもしれませんね（下の構造図を見比べてみてください）。

①	②	③	④	⑤
Clearly,	the new software	is	more efficient	than the old one
It is clear that	the new software	is	more efficient	than the old one

[訳例] 明らかに、新しいソフトウェアのほうが古いものより効率的である。

Fortunately, she did not die.

① 副詞	② 主語	③ 述語動詞	④ 補部	⑤ 副詞

▶ Fortunatelyが「彼女が死ななかった」という文全体を修飾する副詞で、この文自体It was fortunate that she did not die.に相当します。

①	②	③	④	⑤
Fortunately,	she	did not die.		
It was fortunate that	she	did not die.		

[訳例] 幸運にも彼女は死ななかった。